

第二回公開研究会

コメント（黒沢報告を聴いて）

茂木敏夫

評者は本学の国際関係専攻で中国研究を担当しており、日本史については素人なのですが、日本社会に身を置いて歴史を考えている者として、今日の報告については一定の関わりをもたねばならないだろうと考えています。中国について考えている者の立場から、報告を聴いて考えたことを、大略三点述べさせていただきます。

第一に、歴史研究あるいは歴史認識の枠組をめぐる問題について、報告を聴きながら考えたことを少し申し上げます。次いで第二として、その枠組の背景には、近代、つまりモダンとかモダンティとかいうことをどう受けとめるのかという問題があるのではないか、ということとを指摘したいと思います。その際、その近代をどう受けとめるのかについては、日本社会における文脈と、日本の周辺諸国、中国や韓国、台湾などの社会の文脈とが違っていて、そこには大きなズレがあり、そのことが大きな問題を生じさせているのではないか、ということとを簡単に論じてみるつもりです。最後に第三として、報告の最後にあつた、植民地の問題をどう組み込んで歴史認識をつくっていくのかとい

うことについて、私なりの考えを申し上げることで、コメントとさせていただきます。

まず第一点といたしましては、歴史研究あるいは歴史認識の枠組と言いましたけれども、報告では枠組という言葉は使っておりません。東京裁判の打ちだした歴史であるとか、マルクス主義歴史学であるとか、あるいは一九六〇年代・七〇年代以降の伊藤隆氏に代表される実証主義の研究であるとか形容されていたわけですから、これらは結局、歴史研究や歴史認識をめぐる枠組の問題だろうと考えましたので、ここでは枠組と申し上げさせていただきます。

枠組について考えるにあたり、一般論として、どんな枠組も万能な枠組というのはいないわけで、それぞれの枠組に限界と可能性とがあるということを確認しておきます。ある枠組をとったことよって見えにくるものと、逆にその枠組をとったことよって別のある部分が見えなくなってしまうことがあるということです。それぞれの枠組はそれぞれの状況のなかで、その状況を認識したり、そこに何らかの問い

かけを行ったり、その現状を改変あるいは保守したりするために採用されたものです。その意味で、それぞれの枠組にとって、何が問われているのか、そしてなぜそれが問われるのか、が重要になってきます。いったい誰が、現状をどう考え、どのように改変あるいは保守しようとしているのか、そしてそれはなぜなのか、が考えられねばなりません。その意味で、枠組は価値中立的ではありません。どんな枠組もやはり何らかの価値判断を含んでいるわけです。報告のなかで「政治性」という言葉がしばしば使われておりましたけれども、どんな枠組をとろうと何らかの政治的な意味はもってしまっているわけですから、「政治性」という言葉に解消させず、それなら個々の枠組がどのような「政治性」をもったのか、それはなぜなのか、を丁寧に分析することが生産的なのではないでしょうか。

ところで、その枠組ですけれども、たとえ同じ枠組であっても、それは時代により、あるいは状況により、コンテキストによってその意味が変わってくることも十分注意する必要があります。例えば、報告のなかではむしろ「理論先行」という評価を与えられていたマルクス主義の歴史観や歴史研究ですが、それはなるほど人類の歴史的發展を、生産関係という観点から一貫した理解ができるように構築した、精緻な理論によるものなのです。たしかにその本来の意味において、理論先行という性格を内包していることは間違いないと思います。しかし、戦前の日本の知的状況におけるマルクス主義の場合、当時は皇国史観といわれる、体制の側の絶対的な、大きな物語が存在していた

ため、野に在ってそれに抵抗する理論として機能していました。マルクス主義の理論に当てはめて、それを準拠枠組として実証する、その意味ではたしかに理論先行ではありますが、しかしそこで実証された「事実」によって皇国史観の大きな物語の支配に抵抗するという意味で、この時代においては、実証という手続きにこそマルクス主義歴史研究の真価があったといつてよいでしょう。戦前戦中において抵抗する実証主義史学としてマルクス主義の歴史研究が作用したということこそが、まさに戦後のマルクス主義の歴史研究にある種の正当性を与えていったともいえます。それが今度は戦後になって、皇国史観という大きな物語が崩壊してからは、マルクス主義の方が知的世界におけるグラウンド・セオリーになってしまいました。冷戦のなかで西側陣営に組み込まれた日本において、体制批判の根拠として一定の意味はもったものの、データが進み社会主義陣営内部の矛盾が露呈したことによって、マルクス主義歴史学は徐々に抵抗の理論としての批判性を失って教条化してしまったのではないのでしょうか。こう考えると、報告で指摘された伊藤隆氏らの実証主義の意義についても理解しやすいでしようし、また、この実証主義のもつ「政治性」も明らかになってくると思います。

第二として、枠組の背景として、なぜそのような枠組がとられたかを考えるにあたり、もう少し広く社会的な、あるいは政治的、文化的な状況を考えてみてよかったですのではないかと思います。

例えば、東京裁判、GHQの打ちだした歴史観という議論などについて、それは間違っていないと思いますが、でもそうは言いながらも、そのGHQのうち出した歴史観を広く受け入れていった当時の日本社会というものがやはりあったわけです。最近の例では、アメリカを中心とする多国籍軍がイラクに行つて、民主主義などアメリカ型の価値観を持ち込もうとしたわけですが、しかしイラクの社会で、戦後の日本におけるように受け入れられたのかというと、必ずしもそうではない。受けとる側の論理というのか、受容されていく論理というものがあるわけです。

戦後日本について考えると、マルクス主義の歴史観が広く受け入れられていた戦後日本の知的世界では、非マルクス主義の側も含めて、確固とした西洋近代モデルが共有されていて、成功したと思つていた明治以来の近代化が結局一九四五年八月一日に帰結してしまつたのは、いったいどこで、どう間違つたからなのだろうかという問題が共有されてきました。つまりそこには「間違つた近代」と「正しい近代」とがあり、その「正しい近代」は西洋の近代でした。だからこそ、正解としての西洋近代モデルからのズレを測定して、これを誤りとして採点、つまり減点し、その誤りがいつ、どこで、なぜ生じたのかを究明することが、日本近代史研究の課題となつたわけです。正解としての近代というものが確固としていたわけですが、それが広く受け入れられていた状況が、その後一九六〇年代末、七〇年代くらいからでしょうが、その近代の絶対性が動揺し始めます。マルクス主義の歴史学な

どが一定の力を失つていき、取つて代わられるようになっていく背景には、歴史研究の方法や理論に内在する問題性だけでなく、それを包んでいる社会的、政治的、さらには文化的な背景があつたのではないか、その背景が大きく変動した結果、個々の歴史研究の枠組の意味も変容したのではないか、ということを描いておきたいと思ひます。そう考えると、マルクス主義歴史学に対する「理論先行」という評価は、このような変容の結果からの評価でもあることが理解できるでしょう。

報告では一九八〇年代以降、中国や韓国などで「歴史の政治化」が起こり、それが「国際化」していったことが述べられました。その背景にも同じような問題があるのではないのでしょうか。その際、そのような周辺諸国における問題化と日本における歴史の枠組の位相の変化との間に大きなズレがあるのではないか、ということについて指摘しておきたいと思ひます。

日本において西洋近代モデルが動揺を始めた、まさにその時期、一九七〇年代から台湾や韓国などアジアNIEsが開発独裁のもとで経済成長を始め、その社会が豊かになっていきました。それが八〇年代における台湾や韓国の民主化につながっていきました。一方、中国大陸の方も八〇年代に改革開放政策のもとで経済成長を始めました。こうした状況のなかで、民主化された韓国・台湾では、人々は言いたいことを言えるようになり、中国も豊かになっていくなかで、これもある程度締め付けが緩くなつていきました。冷戦の崩壊については報

告のなかでも指摘されていましたが、その冷戦崩壊は、まさにそうした周辺諸国の経済成長と社会変容のさなかに起こりました。さらに、九〇年代末以降はグローバリゼーションのなかでの情報化の進展が、この社会変容を加速させています。

これは中村政則先生が言われていたことですが、戦後五〇年の一九九五年に村山首相談話で戦後に一区切りをつけたと日本社会は思ったけれども、いま述べたように、冷戦の崩壊や経済成長、民主化の進展などによって周辺諸国の社会では、この頃から、それまで封印されていた戦争や植民地について自由にもが言えるようになってきたわけです。むしろ周辺の国々では、この戦後五〇年の頃から「戦後が始まった」といってもよい状況が生まれました（中村政則「終わった戦後と終わらない戦後」『歴史学研究』第八一八号、二〇〇六年）。ここに大きなズレがあるわけです。この間、日本の社会はむしろ近代を相対化していき、いわばポスト・モダンになっていく。逆に、この時期に一貫して経済成長をした周辺諸国の社会は、物質的な豊かさや民主化など、いわば近代の果実を求め、それを急速に獲得していききました。それはいまも続いています。つまり、日本や欧米がポスト・モダンになっていくところに、アジアはますます近代主義になっている現状があります。現在のアジアは欧米以上に欧米中心主義に、西洋以上に西洋至上主義になっている感があります。こうした近代をめくつてのスタンスのズレがあり、これが歴史あるいは過去を問いなおすことについての大きなズレを生じさせているのではないのでしょうか。日本

近現代史研究者である報告者とは違って、私はその隣の中国を見ているものですから、見えてくる風景が違ってくるのかな、などと感じながら、報告をうかがっていました。

最後に第三点として、植民地についての指摘ですが、これは報告に私も同感しております。ただ、報告では日本を、戦後の日本という国家のまとまりを自明のこととして報告されていたようです。朝鮮に言及し、ペーパーのなかでは注で台湾をあげていましたけれども、その「植民地」という概念をもっと柔軟に広く考えてみると、歴史を考えるうえで、さらに可能性が広がるのではないかと考えました。

例えば、明治日本が進めた沖縄と北海道とを一元的な支配に取り込んでいく動きも、これも一つの「植民地」、あるいは「植民地主義」と理解できるでしょう。近代世界に直面して欧米列強の圧力のもとで、欧米的な近代国家に再編成していかなければいけないという課題に直面したときに、琉球の「日清両属」が問題になり、これを日本の主権に組み込んでいったわけですが、これと同様の動きは、ほぼ同じ時期、日本にやや遅れますが、中国を支配した清朝が新疆や台湾に、もう少し後になればチベットのほうに向けて、そのように辺境を直轄支配に組み込む動きを始めていくわけです。清朝が台湾を直轄支配に組み込んでいった直接の契機は、日本の台湾出兵です。そしてその台湾出兵は、琉球帰属問題に端を発します。日本の台湾出兵に有効に対応しきれなかったという反省から、清朝中国は台湾を直轄支配に組み込みま

す。日本が欧米の圧力に抵抗する形で周辺に植民地をつくっていく、そして欧米の帝国主義・植民地主義に抵抗するなかで、あるいは日本の植民地主義に抗するなかで、中国も辺境に植民地をつくっていく。こういう構造を考えていくと、植民地にした側とされた側という単純な二項対立では済まなくなります。植民地主義の連鎖を考えねばなりません。欧米列強の植民地主義にさらされている日本がもっと弱いところ、自身の辺境や周辺諸国を植民地にしていったわけですが、欧米に加えて日本の植民地主義の圧力を受けた中国が自らの独立を守るために、同じように曖昧だった辺境に排他的な実効支配を構築していききました。こう考えていくと、植民地について、もっと普遍化して考えることができるのではないのでしょうか。

また、欧米列強の植民地主義への対抗がアジアへの植民地主義に帰結したという日本近代の性格は、植民地主義の連鎖とその重層化として考えることにより、その意味を立体的に考えることができるわけで、この点で、まさに今回の報告の中で指摘されていたような、いわゆる「先の戦争」のもっている複雑さ、多面的な性格を見通す視野が開けてくるのではないのでしょうか。

そして、植民地という問題が戦争の問題と間断なく連続しているということによって、戦争とその前後における日本知識人の思索はアジア大、あるいは世界大での検討に値する営為となってくるように思います。戦中から戦後において、例えば、この研究会のプロジェクトにもかかわらず丸山眞男であるとか、あるいは竹内好であるとか、少なく

ない日本の知識人がさまざまな思想的格闘をしました。戦争や植民地も含め、近代という問題に直面しながら繰り広げた彼らの思索は、日本の経験にとどまらず、もっと拡げて普遍的な経験として共有できるのではないのかと考えます。特に、現在では欧米以上に近代主義になっている中国などアジアでは、近代主義と同時に現在の欧米に流通するポスト・モダンの考え方も入って来ていて、相反する考え方が混在して、いま乱戦、格闘しています。日本が経験したよりもっと急激なスピードで近代をめぐる問題の磁場に取り込まれている今日のアジアの社会では、この開国以来一五〇年の近代日本の経験というのか、日本が悩んだこの悩みというのは、もっと普遍化できる悩みなのではないのでしょうか。その契機として、報告で指摘された植民地の問題というのは重要な指摘であり、これは、近代をめぐる大きな問いに、日本という枠を越えて大きく開かれていく可能性があるのではないか、などと思いながら報告を聴かせていただきました。

以上、簡単ではありますが、報告のなかで展開された議論を、より広く、より多くの論点に開いていく契機とできたならば幸いです。

(研究会の録音記録に、わかりやすくするために加筆した。ただし、論旨に変更はない)

文部科学省 平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
20世紀日本における知識人と教養
—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—

第2回 公開研究会

再考・戦後の日本近代史認識

—昭和戦前期の「戦争の構造」と「歴史の構造」をめぐって—

講師： **黒沢 文貴氏** (東京女子大学 教授)

コメンテーター： **茂木 敏夫氏** (東京女子大学 教授)

2013年9月27日 (金)

時間：16:00～17:30

会場：東京女子大学 24201 教室

申込不要・入場無料

問合せ先：東京女子大学 丸山眞男記念比較思想研究センター
〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1
Tel: 03-5382-6817 Fax: 03-5382-6120
E-mail: marubun@lab.twcu.ac.jp
HP: <http://www.twcu.ac.jp/facilities/maruyama>

講演の概要

本報告は、戦後史のなかで形成されてきた日本近代史認識、とりわけ太平洋戦争もしくは昭和戦前期をめぐる歴史認識について検討しようとするものです。それによって、戦後の歴史研究者たちの戦後認識の一端を考察することができればと思っています。なお報告は、次の内容を予定しています。

1. 歴史認識の分裂か、多様な歴史認識の共存か
2. 政治性のまわりついた歴史認識
3. 「歴史」の「政治化」と実証研究、そして「歴史」の「政治化」の「国際化」
4. 昭和期の戦争の複雑さ
5. 昭和期の「戦争の構造」をどのように理解するのか
6. 「歴史を忘れない」ことからくる対立と和解
7. 「戦争の構造」と「歴史の構造」

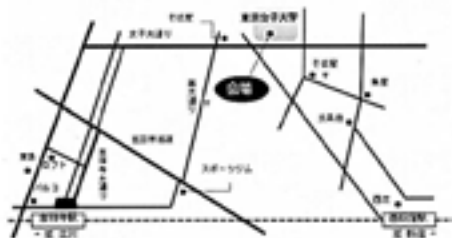
講師プロフィール

黒沢文貴 東京女子大学・現代教養学部教授。専攻は日本政治外交史。著書に、『歴史と和解』（イアン・ニッシュ氏との共編、東京大学出版会、2011年）、『二つの「開国」と日本』（東京大学出版会、2013年）、『大戦前期の宮中と政治家』（みすず書房、2013年）など。

茂木敏夫 東京女子大学・現代教養学部教授。専攻は中国近代思想史。著書に、『変容する近代東アジアの国際秩序』（山川出版社、1997年）など。

東京女子大学へのアクセス

JR西荻窪駅北口より徒歩約12分。
バスの場合は西荻窪駅北口より吉祥寺駅行きバス/JR・京王井の頭線吉祥寺駅より西荻窪駅行バスで「東京女子大前」下車。



丸山真男文庫とは

日本政治思想史の研究を中心に、政治思想家として世界に向けて発信し続けた丸山真男は、戦後の日本を代表する知識人でありましたが、その思索の跡を伝える約2万冊の蔵書と約3万頁の草稿類が1998年に東京女子大学に寄贈されました。東京女子大学は、日本における丸山真男研究の拠点となり、貴重な資料がひろく活用されることを願って丸山真男文庫を設立し、調査と整理を進めるとともに講演会、公開研究会、公開授業等を開催しています。

「20世紀日本における知識人と教養」プロジェクトとは

東京女子大学は、2012年度より、丸山真男文庫の資料に基づいた研究プロジェクト「20世紀日本における知識人と教養—丸山真男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」を開始しました（文部科学省平成24年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」採択プロジェクト）。このプロジェクトは5年間にわたって二つのテーマ（「20世紀知識人の教養と学問—丸山真男文庫を素材として—」および「丸山真男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築」）を軸として、研究を進めています。（HP：<http://www.twcu.ac.jp/facilities/maruyama/project>）